

『科学者と軍事研究』

2018年01月25日

原子爆弾は当時の最先端の科学者たちが動員され、莫大な費用をつぎ込み、開発された。そして、広島と長崎に投下され、人類史上、類を見ない惨劇をもたらした。原爆製造に関わった科学者たちの中に、深い罪責を表明する人々もいた。

日本では、1950年に「日本学術会議」から、下記のような「戦争を目的とする科学の研究には絶対に従わない決意の表明(声明)」が出された。「日本学術会議は、1949年1月、その創立にあたって、これまで日本の科学者がとりきたった態度について強く反省するとともに科学文化国家、世界平和の礎たらしめようとする固い決意を内外に表明した。われわれは、文化国家の建設者として、はたまた世界平和の使として、再び戦争の惨禍が到来せざるよう切望するとともに、さきの声明を実現し、科学者としての節操を守るためにも、戦争を目的とする科学の研究には、今後絶対に従わないというわれわれの固い決意を表明する。」1967年に、周りを取り巻く情勢が厳しくなったとして、下記のような声明を出している。「ここにわれわれは、改めて、日本学術会議発足以来の精神を振り返って、真理の探究のために行われる科学研究の成果が又平和のために奉仕すべきことを常に念頭におき、戦争を目的とする科学の研究には絶対にこれを行わないという決意を声明する。」再度の決意表明を出している。2017年に、三度目の声明を出している。「近年、再び学術と軍事が接近しつつある中、われわれは、大学等の研究機関における軍事的安全保障研究、すなわち、軍事的な手段による国家の安全保障にかかわる研究が、学問の自由及び学術の健全な発展と緊張関係にあることをここに確認し、上記2つの声明(1950年と1967年)を継承する。」日本学術会議はくり返し、軍事と関わらないと表明している訳である。

これらの声明を読むと、科学者たちは軍事には関わらず、平和国家の建設に寄与すると言っていると受け止められる。ところが、現実とは全く違ってきている。

宇宙論・銀河物理学者で、名古屋大学名誉教授の池内了氏が、9条の会の集会で、大学と軍事研究が密接に結びついている現状を、深い憂慮をもって話された。時代を反映する講演であった。池内氏は、昨年12月『科学者と軍事研究』を上梓している。権力の魔性とも言うべき実態を浮かび上がらせ、空恐ろしくなった。

戦後すぐの頃は、科学者たちは戦争に動員された屈辱を持ち、原爆製造の罪責も実感したのであろう、軍事研究には関わらないと強く表明していた。しかし、政治状況が変わり、今や、日本は不戦、非軍備の憲法を持ちながら、世界第6位くらいの軍事力を持っている。大学は、軍事に関わる研究に大きくシフトしている現状にある。

まず、民生に用いられる科学と軍事に転用される科学の区別がつきにくくなった。科学者は民生のつもりでも、実は、軍事開発であったというケースが多くなった。また、自衛隊は自国防衛のための軍備力であると、大方認知されている。防衛と攻撃の区別はつかないにもかかわらず、防衛のための軍事研究は許されるという科学者も出ている。最近では、大学への助成金が削られる傾向にあるが、防衛省から大学に「基礎研究」の名の下で、多額の研究費が出されている。軍学共同が進んでいて、「軍」が主で、「学」が従になっている。それだけでなく、企業から、更に米軍からも大学に研究費が出されている。大学改革と称して、軍拡を進める権力に都合の良い形で行われ、学問の自由、自治が損なわれている。池内氏は軍事動員が始まるのではないかと「科学者の良心」を問いかけている。そして、世論の動向が、大学の軍事研究阻止につながると訴えている。